

大雪山国立公園松仙園地区適正利用推進協議会（第1回）

議事概要

平成 28 年 12 月 22 日（木）15:30～17:30

上川町役場 大会議室

1. 開会
2. あいさつ 環境省北海道地方環境事務所 徳丸所長
3. 出席者紹介
4. 議事

(1)大雪山国立公園松仙園地区適正利用推進協議会設置要領（案）について

資料 1：大雪山国立公園松仙園地区適正利用推進協議会設置要領（案）

参考資料 2：昨年度の松仙園地区に関する取組との変更点

（事務局）

- 今回環境省で松仙園地区の木道を整備するにあたり、新たに大雪山国立公園松仙園地区適正利用推進協議会を設置して自然性の高い湿原の中を通る歩道を適切に管理するための計画についてご意見を頂くなど、皆様にご協力いただきたいと考えている。
- 参考資料 2 により、平成 27 年度までの検討状況と平成 28 年度以降の予定を説明。取組内容に変更があるが、これは、利用調整地区が①利用者が増加し、②増加により自然環境への影響が生じている場合、③手数料を伴う立入り認定制度により利用者を低水準でコントロールして影響を低減するのが趣旨である一方、特に①②を示す科学的根拠が現状ではないこと、また、法律に基づく立入りの認定制度を現場で運用できる体制が十分なものとなるためにはさらなる調整が必要であると考えられたため。
- 資料 1 に基づき、大雪山国立公園松仙園地区適正利用推進協議会設置要領（案）を説明。

（北海道大学大学院愛甲准教授）

- 要領のことではないが、昨年度提示された利用調整地区という法制度ではなく、任意のルールにするとの説明があったが、その理由としては利用者の増加による影響のデータが取れておらず、利用調整地区が今回のケースには制度として合わないという判断したという理解でよいか。

（事務局）

- そのとおり。現時点で、利用調整地区を指定する必要性を説明するだけのデータがない状況。

（北海道大学大学院愛甲准教授）

- 利用調整地区の導入の判断は影響が出てからなのか、または、影響の恐れが出たら行うのか。完全に影響が出てからでは遅いのではないのか。例えば 2 年程モニタリングして影響が出そうだということであれば、場合によっては利用調整地区を導入することができるのか、それとも完全に影響が出てからではないと導入できないのか。

(事務局)

- 参考資料 2 に「供用開始後 2 年程度後に利用調整地区への指定の必要性を協議会にご意見を聞いて検討」と記載した。歩道が供用されて 2 年程度経てば、どのくらい利用の伸び率があるのか、将来的な影響があるのかがある程度予測がつくと思う。完全に影響が出てしまってからでは遅いというのはその通りで、皆様のご意見を伺いながら判断したい。
- 影響が生じる見込みがある場合には指定の根拠となる科学的根拠も整理できるはずであり、根拠があれば指定できるはず。5～10 年ということではなく、2 年程度で影響が出る前に早めに予防するという対応ができると思う。

(事務局)

- 他ご意見なければ、要領を承認いただけるか。

(一同承認)

(2) 松仙園地区に関する今後のスケジュールについて

資料 2：松仙園地区に関する今後のスケジュール

(会長)

- 平成 32 年か 33 年に利用調整地区の指定に関して検討する可能性があるということでしょうか。

(事務局)

- そのとおり。

(3) 松仙園地区の高層湿原について

資料 3：松仙園地区の高層湿原について

(会長)

- 松仙園地区における整備内容を検討するにあたって、当事務所では北海学園大学の佐藤謙先生と、北海道大学の富士田裕子先生に植生調査を実施していただき、助言を頂いている。本日の協議会には富士田先生にお越し頂いており、調査の内容をお話いただければと思う。

(北海道大学富士田教授)

- 本日は松仙園地区の高層湿原について説明したい。
- 湿原には様々なタイプがあるが、地球上における湿原の面積の割合は陸地の 10%とも言われている。湿原は、美しい景観であるばかりでなく、特有の様々な生き物が生育・生息している。かつて湿原は不毛の地と言われたが、近年は様々な角度から存在が高く評価されるようになった。例えば、グローバルな視点では、湿原の中でも、植物遺体の堆積する泥炭層は、地球上におけるカーボンシンク、つまり炭素をため込む場所となっている。また、渡り鳥の重要な中継地としてラムサール条約湿地に登録される場合もある。一方、地域の視点で見ると、地域固有の自然空間を有し、貴重な遺伝資源保存の場にもなっている。多くの水をため込み、気象条件の緩衝機能もある。
- 北海道、東日本、西日本の湿地について、明治大正時代から現在に至る面積の変化を示した国土地理院の図を見て欲しい。黄色は消滅した湿原、青いところは増加した湿原、緑は残存している湿原。これをまとめると、残存している湿原と増

加した湿原のほとんどが北海道にあることがわかる。

- 結果として、自然の面影を残す湿原は北海道に多いが、これは北海道が湿原形成に好適な気象や環境状況を持っていることと、人口密度が低いこと、開発の歴史が浅いのが関係していると思う。
- 私どものグループでは、1997年に北海道の現存湿原の目録を作成した。これは、開発の影響を特に受けやすい性質を持っている湿原を保護、保全するための適切な方策を提示するためには、湿原の特徴やそこに生息・生育する生物等さまざまな情報を整理した目録が必要であるとの考えによるもの。その当時1ヘクタール以上の湿原は150箇所あったが、その後目録を更新した結果、1ヘクタール以上の湿原は179箇所となった。これは湿原の数が増えたのではなく、これまでの目録では把握されていなかったということ。
- 更新された目録では、179のうち60の湿原が標高400m以上にある山の湿原で、残りの119が低地の湿原。
- 図「北海道の泥炭地と現存湿原の分布」は、ピンク色が泥炭地でかつて湿原だったところ、赤が現在も湿原であるところを示したもの。これによると、湿原の宝庫だと言われた北海道でも、7割以上の湿原が無くなっている。よく残っているのは釧路湿原や別寒辺牛湿原の道東地方で、札幌を含む石狩地方は、日本で最大の湿原だったが、ほとんどが開発された。
- 山の湿原は点在しているが、特に北海道中央部に集中しており、あまり開発の影響は受けていない。ただし、林道建設や旅行客の入込数の増加が問題になっている。
- 泥炭が形成されるには、植物が生育し、有機物の生産量が分解量に勝り、水分過剰な条件が必要。したがって、泥炭は熱帯から寒帯まで世界で広く見られる。しかし、気候条件が泥炭の形成に適している、広大な湿原が形成される泥炭多産地域となるには、年間降水量に対する年間蒸発が1以上の地域、永久凍土が形成される地域を除いた地域になるので、気候的には亜寒帯から温帯に分布している。
- 東京大学の坂口先生によると、7月の平均気温が20度のラインが泥炭多産地域の南限と言われている。気象データを使って、北海道の7月平均気温を計算して等高線を作ると、平均気温が20度以上になるのは、渡島半島の西側、積丹半島の東側、後は内陸の盆地だけで、これ以外は20℃以下なので、北海道はどこでも泥炭が形成されやすい条件下にあると言える。いわゆる湿地は日本国中で見ることはできるが、植物遺体である泥炭が堆積して発達して、ミズゴケが生えているような高層湿原になったものは、中部地方以北の山岳地域と北海道の低地にしか見られない。こちらの図の黒い点で示したものが先ほどの説明したもので、ほとんどが中部地方から関東地方の山岳地帯、奥羽山脈、東北地方から北海道に至っている。一方、低地の高層湿原は、静狩湿原や歌才湿原が南限で、これより北や東の低地に位置している。
- 図「山岳地域の湿地と低地の高層湿原における標高と北緯の関係」は、標高を縦軸に、北緯を横軸にとり、その中に主な泥炭地湿原の位置を示した図である。これを見ると黒丸の湿原が標高700m付近から上に集中していて、多くは標高1000m以上に集中している。南ほど気温が高くなるため、高いところに高層湿原があり、北に行けば行くほど低いところにも高層湿原があることから、右方下がりの矢印のような図となる。一方、低地の高層湿原は北海道のみに分布しは図上でかたまっており、標高20m以下でほとんど平らなところしかないのがわかる。
- 図「北海道の山岳（山地）湿原」をご覧いただきたい。沼ノ原湿原は、規模と多

彩さから見ても大雪山の中でもトップクラスの湿原といえる。多くの池塘や沼が点在している。こちらは、高根ヶ原の登山道から西の方に入ったところに位置する平ヶ岳南方湿原である。田んぼの畦の様に見えるのが、ケルミ・シュレンケの複合体と言い、見事に縞々になっている。それから皆さんご存じの雲井ヶ原であるが、残念ながら今、木道が壊れていて、行くことができないので何とかして欲しいと思っている。そしてこちらが浮島湿原。日本海側の雨竜沼湿原で、こちらにもたくさんの池塘があり、非常に花が美しいところで、近年登山客が増えているところである。

- バージョンアップした北海道の現存湿原目録の図で、大雪山周辺を拡大してみると数えてみると、27の湿原があり、北海道の中央部に集中しているのがわかる。今日話題の松仙園は沼ノ平に含まれている。松仙園の航空写真をみると、まず二の沼から見るとうっすらとかつての登山道が見える。ここにはかつての登山道と同じように道を付ける案と聞いている。
- 図「二ノ沼」の赤い矢印は、湿原がこの矢印方向に傾いているという意味。等高線に沿って、黒く見える水溜りと高い部分が縞状になっているが、水がたまった窪地をシュレンケ、帯状の高い部分をケルミあるいはブルテと言い、独特の縞状の地形が見られる。そして登山道の途中にビューポイントがあり、ここで登山者は写真を撮りたいと思われる。登山道は二つのケルミ・シュレンケ複合体の間を縫うように通ることになるので、基本的にはこのルート以外、選びようがないと思う。湿原の縁を歩いたり、ササ地を伐開してルートを作ることも考えられるが、かなりの時間と距離がかかるので、やっと湿原に出ても迂回させられると登山者ががっかりすると思うので、私も現在の案は適切だと考える。
- 一方、四の沼の方は、こちらでもケルミ・シュレンケ複合体が発達している。写真を見ると、縞状のケルミ・シュレンケがあり、こちらの方が二ノ沼よりも、シュレンケもケルミも細長くて切れ目なく縞状になっており、非常に発達したケルミ・シュレンケ複合体となっている。湿原の西の端にはアカエゾマツが生育し、湿原を縁取っている。このような景観を考えると、四ノ沼湿原はコンパクトにまとまった山岳地域の典型的な湿原と言えよう。ただし、旧登山道の出入り口の付近が、航空写真上でも黒っぽく見え、かつて人が歩いた跡の影響がはっきりと残っているが、これ以外の場所はほとんど手つかずの状態と言える。このため、非常に自然度が高く、大雪山の中でも高レベルな景観が見られるところで、我が国の山岳地域の湿原の規範のようなどころだといえる。
- 登山道の跡地について言うと、二ノ沼の方は植物が生育しており回復途上である。しかし、回復のスピードは遅く10年でもこの程度である。
- 一方、四ノ沼は土壌水分が多いのか、植生がほとんど回復していないところが目立つ。場所によっては、ぬかるみの状態で、長靴のようなものでない歩けないところもあり、大雨の時はたぶん旧登山道が水みちになって表土が流されてしまうと思う。ここに登山道を整備した場合には、さらに負荷がかかってしまうので、植生回復の手助けをする、復元するという考え方があってもよい。
- 四ノ沼に登山道を整備しても、素晴らしいケルミ・シュレンケ複合体を間近に見ることはできない。沼の岸からは全体を見ることができるとは、登山者が沼の周辺に集中的に入り込んで、さらに植生が悪化する懸念がある。四ノ沼の中に登山道を通した場合、登山者は湿原内を歩くという満足感は得られるが、縞々のケルミ・シュレンケ複合体の全体景観を見ることができない。そこで、登山道を湿原手前から平尾根の上のハイマツ低木林を通して、四ノ沼の南側をトラバースして、二

沼の登山道と合流することを提案したい。平尾根の上から撮った写真をご覧頂きたいが、このようなところに、ひと休みする場所を設置して、素晴らしい四ノ沼の景観を見ていただけたらよい。この地点からさらにトラバースし、四ノ沼の景観を見ることが出来る箇所がある。沼ノ平や沼ノ原など湿原を見られるところはあるが、縞状態が見られるのはここだけなので、よいのではないかと思う。

○まとめると、松仙園は山岳湿原の典型的な景観を有している。特に、四ノ沼はケルミ・シュレンケが帯状に配列した複合体の発達が顕著で、その様子を見ることが出来る理想の場所で、ほとんど荒らされていない自然度が非常に高いところである。ただし、湿原内に登山道を作っても、負荷が大きいみならず、登山者から地形が見えないこともあり、登山道を迂回させて高いところから眺めるのもいいのではないかということが私の意見である。

(大雪と石狩の自然を守る会)

○ケルミ・シュレンケは遷移の途中の環境なのか。それとも、長く状態が保たれる環境か。

(北海道大学富士田教授)

○人為的な影響や温暖化がなければ、数百年は長く状態が保たれると思う。湿原は4000年から5000年程度かけて形成されてきたものであり、詳しくはボーリングデータを見ないとわからないものの、少なくとも現在の状態に至ってから数百年は経っているだろう。

(会長)

○世界的にみたらどうなのか。

(北海道大学富士田教授)

○世界的には湿原は多くあるが、日本は泥炭多産地域の南限である。北欧やヨーロッパ、カナダには同様の大規模な湿原が多数ある。日本では主に山岳地帯に類似の景観の湿原が分布し、動植物は各国と共通のものもあるが、独自のものも存在するので重要である。

(4) 大雪山国立公園松仙園地区適正利用推進計画(案)について

資料4-1: 大雪山国立公園松仙園地区適正利用推進計画(案)

資料4-2: 松仙園地区歩道整備の考え方について

参考資料1: 大雪山グレードについて

参考資料3: 松仙園地区適正利用推進計画(案)補足説明資料

(事務局)

○資料4-1、4-2、参考資料1、3により、松仙園地区適正利用推進計画(案)について説明。

(上川振興局環境生活課)

○利用調整地区ではないということであるが、まずは1日当たりの利用上限数は設けず、まずは2年間程度歩道に対する影響を見て、評価したうえで、影響があるのであれば利用調整地区の導入を検討するということがよいか。

(事務局)

○そのとおり。

(北海道大学富士田教授)

○山岳関係者の方から再開して欲しいという意見が多いと聞いたが、モデルコース

としてはどのように考えているかお聞きしたい。一方通行と伺っており、湿原に至る途中はササ藪や二次林を延々と歩くことになる。どちらに抜けることを想定しているか。

(事務局)

○皆さんから松仙園自体が紅葉の名所であると聞いており、松仙園自体が目的になりうる場所と聞いている。私としては、まず松仙園自体を見てもらい、三十三曲あるいは滝のある歩道を下りで戻るという周回ルートの利用を考えている。

(北海道大学富士田教授)

○ぐるっと回って愛山溪に下りる1日弱のルートということか。途中から沼ノ平の半月沼を抜けてどこかに行くということはないか。時間的には少し難しいと思った。

(事務局)

○体力があれば沼ノ平のあたりまで行って戻るという利用はあると思う。事前に皆さんに話を伺った中では、下りを利用したいという意見も少なからずある。登山者目線でいけば、縦走して、体力があれば松仙園を抜けて下ってくるというのはあるかもしれないが、自然性が高いところで保護するためということから、まずは登りの一方通行ということで実施し、計画を一度決めたからその後も変えないということではなく、利用状況を見ながらどのようにしていくか考えることもできる。

(北海道大学富士田教授)

○一方通行だとしても逆まわりはどうなのか。三十三曲から登って、半月沼、五の沼、四の沼を回って、あとは下りというほうが楽で、ポイントを何箇所か見られるかと思う。環境負荷を考えれば登るべきという考えなのだと思うが。

(事務局)

○私たちとしては、自然性の高い場所であり慎重に進めたいと考えている。植生へのダメージを考えれば大きな木道がなければすれちがいはできない。最小限の整備で登りだけの一方通行としたい。

(旭川山岳会)

○登山者側の視点からはルートが逆の方が歩きやすい。愛山溪にバスがないため、北鎮岳方面から下りてきても、沼ノ平から旭岳方面に抜けていく人が多い。車を別に置いておけばよいが愛山溪に入るのに結構時間がかかる。旭岳からお鉢を回って、北鎮岳に行ったり、北鎮岳から下りるにしても、裾合平を通過して旭岳に抜ける。そうであれば、車を旭岳に置いておけばよい。本当は愛山溪にバスがあればよいが、もっと利用が多くなるかもしれない。最初の2年間は今の登りの一方通行で仕方がないと思う。開けてくれることがありがたい。

(会長)

○他ご意見ないか。

(北海道大学大学院愛甲准教授)

○登りか下りかということだが、自主的なルールということはそれほど厳しく指導できないということである。下りの方がよいという意見が多いならば、オープンにして一方通行となった時に、実態として下りの利用をされてしまうことが多い

ということになるかもしれない。従いやすいルートのほうが守られやすいと思うがどうか。

- 登りの一方通行に関しては、昨年の会議では、旭岳を見ながら登っていくということ、ゲートの管理がしやすい場所ということだったと思うが、利用調整地区でなくなった場合、登りである理由があまり明確でないように考えるがどうか。

(事務局)

- 自主ルールではあるが、一方通行ルールの順守状況の確認が必要と思う。まず、これまでの議論の経緯を十分に踏まえ、最初のルールを運用してみて、どれだけの利用や人の動き、要望が出てくるのかを評価することが必要と思う。

(大雪と石狩の自然を守る会)

- 一方通行を八島から下るのではなく、愛山溪側から登るということにした理由は何だったのか。

(事務局)

- 愛甲先生のお話にもあったように、旭岳を見ながら登ることができるということやその先へのルートの展開がしやすいということと、一方通行を管理する際に、最初のゲートが近くないとうまく管理できないということがある。

(大雪と石狩の自然を守る会)

- 旭岳温泉方面から来た場合、松仙園に行くには一度下りからでないといけないことになる。一方で登山道の荒れ方を見ると、上り専用、下り専用と考えると下りの方が荒れやすくなるのではないか。一般に登山者は下りでは段差を小さく取りたい、そのため登山道の脇を通るということがまま見受けられる。登山道の維持管理上は下りとして利用されるほうが荒廃しやすいと考えられる。その意味では愛山溪から上り一方通行は賛成だ。ただ、旭岳方面から来た場合、使えないということになり、悩ましい問題だと思う。

(事務局)

- 三十三曲のルートは環境省直轄で管理している。ここでは登り下りとも利用実績があり、下りによる荒廃の問題はないと言える。松仙園は利用の実績がなく今後利用開始後どのように負荷がかかるか分からない状況で、ご指摘のように下りの利用により荒廃していく可能性があるのであれば、やはり登りの方がよいと思う。

(大雪と石狩の自然を守る会)

- 現在の五の沼、六の沼のルートでも、六の沼を越えて裾合平方面に向かって上りの部分で、せっかく登山道が石組により整備されているのに、下りでは外れて脇の方を歩いているケースが非常に多く、そちらが歩道状になっているところが何箇所もある。上りは比較的大きな段差階段でも上るが、下りは段差を避けて楽な方を歩く傾向になるのは普通だろう。

(大雪山国立公園パークボランティア連絡会)

- 登り優先という考え方がよい。このコースは山岳を利用者が頻繁に使うルートではない。大雪山で湿原を間近で楽しめる場所はほとんどない。沼ノ原も今年の台風の影響で湿原を間近で見ることができなくなった。松仙園は、唯一国民の皆さんが湿原植生の大切さや特異な自然環境をじっくり楽しめる場所だと思う。秋口は登山口から登ると顔が黄色くなるほどカエデの紅葉がきれいである。また旭岳

がきれいに見え、下山では振りかえれば見えるだろうが、景色を飛ばしていくことになる。松仙園の湿原は雨竜沼や釧路湿原などと違い、階段状になって上の湿原、下の湿原が見え、六の沼の先に行くと大沼、小沼の展望台もあり、湿原全体を見渡せるコースである。湿原を楽しむ場所ということであることを周知して、利用者に楽しんでもらいたい。

(上川町産業経済課)

○登りの一方通行については、利用調整地区に指定するという前提で、愛山溪で自然環境の保全についてレクチャーを受けて、お金を頂き、入山するという話がもともとあったと思う。今回は自由に入れるということだが、今後利用調整地区指定の可能性があるのであれば、レクチャーを受けて一方通行という形がよいと思う。利用調整地区になったら一方通行を逆にすることがよいのかということも含め、今から先を見て、登りにしておくということもある。

(北海道大学大学院愛甲准教授)

○計画に記載するかは別にして、なぜ登りなのかを整理しておく必要がある。もう少し先の話になるが、今後札幌などの山岳会や山岳ガイドにルールを周知する際に、なぜかを説明できるようにしておくのも大切である。

(大雪と石狩の自然を守る会)

○登り一方通行とするのであれば、他の大雪山の登山道と別に考える必要がある。他の登山道と同じではなく、松仙園が特別な地区であると考えなければ、利用者はなぜ下ってはいけないのか理解できないだろう。

(事務局)

○ご意見はそのとおりである。環境省が直轄で管理する個別の歩道について、皆さんの意見を聞いて計画を作って管理しようという歩道は、大雪山国立公園でもここだけである。この計画を作ろうとすること自体が、松仙園が特別な場所であり特別な扱いをしているということである。

○また、愛甲先生にご指摘のあったように、なぜ登りなのかということはしっかりと整理する必要がある。次回の協議会で、資料により考え方を示したい。あわせて、適正利用推進計画の本文への追記の必要性も考えたい。また、上川町の渡辺課長からご指摘のあったように、今後、利用調整地区指定もありうる状況の中で、利用調整地区に指定した場合におけるルールとの整合性を考えるのは重要な視点である。

(会長)

○もう少しご指摘の点を補強して次回ご意見伺いたい。

(大雪と石狩の自然を守る会)

○富士田先生の講演のまとめの部分で、迂回して地形的に高いところから湿原を見よとの提案だが、平地ということであれば、その部分も湿原を形成する箇所として重要と考えられる。高いところを選ぶにしても、相当慎重なモニタリングをしないと取り返しのつかないことになりかねない。その点を同じように注目していきたい。よく調べてほしい。世界遺産の精神として世代間倫理という大切な考え方がある。今我々が見ているものは50~100年後の人も見られるようではなければならないというものだ。そう考えると湿原が見られるからよいと簡単にはいかず、

十分考慮していただきたい。

(事務局)

○現地を見させていただいたが、四の沼湿原を見下ろす高い場所というのは、湿原ではなくハイマツ帯の中の岩の上の部分。より重要なのは湿原部分であり、ハイマツ帯や岩稜帯などから影響の小さい箇所を選んでいきたい。

(会長)

○迂回しようとしている南側は、今まで何も利用されていない箇所ということであれば、新設になるので慎重にやるべきということである。

(大雪と石狩の自然を守る会)

○先ほど温暖化の話もしたが、乾燥化が進むとササが入ってハイマツも生育しやすくなり、他の灌木も生え、そういうところが高いところとなると思うが、利用を考えなければ 100~1000 年でも自然の変化に任せればいい、しかし、利用することが前提なのだから自然の変化に沿う利用の仕方を考えなければならない。生物の多様性について言えば、国立公園はのこされた最後の砦と言ってもいい。環境省の責任は非常に大きいと思う。

(北海道大学大学院愛甲准教授)

○愛山溪の入山者数はどのように把握しているか。入林簿か。

(事務局)

○道有林で愛山溪の登山口に入林簿のボックスがある。

(北海道大学大学院愛甲准教授)

○向きは把握しているか。

(事務局)

○愛山溪温泉からの入山は昨年 1295 人とのことである。入林簿に確か行き先や行く方面に丸をつけるようになってきているように思う。分けて集計はしているかは分からない。

(北海道大学大学院愛甲准教授)

○沼ノ平の方へどれだけの利用があるかということが松仙園の利用がどれだけあるかという多少目安になるかもしれない。場合によっては、分岐のところに来年か再来年にカウンターを置いて把握してもよいかと思う。

○もう 1 点、これに関連し大雪山グレードの全体の改訂は実施するのか。

(事務局)

○大雪山グレード改訂するには策定時の体制で検討する必要があると考えている。

(北海道大学大学院愛甲准教授)

○松仙園の話とは離れてしまうが、台風などの影響で、来年度供用できない登山道が発生する。グレードの設定自体は、策定した時の体制で検討する必要があるとのことだが、利用できない区間の情報等をホームページ等でグレードの地図に盛り込むことを検討いただきたい。

(事務局)

○大雪山国立公園連絡協議会のホームページに大雪山グレードの情報を掲載しており、このホームページであれば、周知を図ることが可能であり、検討したい。

(会長)

○松仙園の供用開始の時期あたりに、グレードを点検を検討してもよいのではない
か。

(閉会)